



地域でのたった一人の特定ケア看護師

西吾妻福祉病院 特定ケア看護師 田村美絵

今回担当させていただく西吾妻福祉病院のNDC 4期生 田村美絵です。

NDC研修センターを卒業し、自施設での臨床研修を終了して今年度より特定ケア看護師として活動を始めています。

私が働いている西吾妻福祉病院は周囲を山に囲まれた静かな場所に位置します。群馬県は良質な温泉が多く、中でも最も有名な草津温泉へは車で20分程、ほかにも一時期有名になった八ッ場ダムなども近隣にあります。標高が高く冬には雪が降り、ウインタースポーツなども楽しめます。ここ数年は観光客も減少してきましたが、私が入職した当初はお盆や正月などは病院の前の草津に通じる道路が渋滞して、夜勤明けには帰るのが大変だったことを覚えています。当然救急外来も観光客の受診が多く、海外からの旅行者も訪れるほどでした。

しかしここ10年ほどで病院を取り巻く環境も大きく変化しました。西吾妻福祉病院は病院を取り囲む4つの町と村が設立し、地域医療振興協会により運営されています。開院当初は診療科も多く、外科的手術や分娩対応、心臓カテーテル検査など当院では多くの治療行為を行っていました。しかし医師の異動や退職などで診療科は減り、手術やカテーテル検査なども行えなくなりました。一般病棟と療養病棟で111床あった病床も2019年に療養病棟を閉鎖し、現在は一般病棟と地域包括ケア病棟の74床で運用されています。

日本全体で高齢化が進んでいますが当院周辺も例外ではなく、2005年の当院外来患者の平均

年齢は58.1歳でしたが2020年には76.8歳へと変化しています。退院患者の最頻値も50歳代から70歳代となり、当院に入院する患者さんの9割が4ヵ町村内に居住していることを鑑みると、地域住民の高齢化が深刻化してきていると考えられます。また地域に居住する職員も例外ではなく、病院職員の平均年齢も徐々に高くなってきており慢性的な医師不足、看護師不足という問題を抱えております。医師は東京ベイ・浦安市川医療センターからの派遣や地域の診療所の医師などの支援を受け、また看護師も自治医科大学附属病院から派遣で来ていただいています。私が西吾妻福祉病院に就職したのも自治医科大学からの派遣がきっかけでした。

派遣されてきた当初は大学病院での単科の看護経験しかなく、外来・救急外来・手術室・IVRと多岐にわたる仕事内容についていくことだけで精いっぱいでした。しかし新しい学びは刺激となり、小規模な病院だからこそ多職種との距離が近く、たくさんの人たちと共に働いているという実感が持て充実した日々だと感じていました。それから10年以上の月日がたち病院や病院を取り巻く環境も変化していく中で、このままで良いのだろうかと思案のようになりました。何か新しいことに挑戦したいと考えながらも動き出せずにいた時、NDC研修センターの筑井菜々子さんの講演を聞き「診ると看るをかねそなえた地域医療を支える看護師」に興味を持ちました。

NDC研修センターを修了し、1年間の臨床実習を経て、今年の4月からは地域包括ケア病棟



西吾妻福祉病院

で初めての特定ケア看護師として働いています。地域包括ケア病棟では60日の期間でリハビリを行い自宅への退院を目標とし、在宅での生活が困難な場合には施設入所の調整を行っています。入院期間が長くなってしまいうため基礎疾患の悪化だけでなく、高齢者に多く見られる尿路感染や誤嚥性肺炎、偽痛風といった感染症を発症してしまう場合もあります。しっかりと体調不良を訴えられる患者もいますが、特異的ではない症状やあいまいな訴えにより異常の発見が遅れてしまうことも少なくないと思います。そんな時でも一番近くで長い時間を共有している看護師であれば、後から考えてみれば小さなサインが出ていたと気が付くことがあります。歩行介助の際に少しふらついていた、いつもならもう少し笑顔が見られた、食事をおいしそうに食べていなかったなど些細な変化ですが、その変化を見逃さずに観察を行っていければ異常

の早期発見につながっていくことも多いと思います。看護師が感じる「なんか変だな」を、疾患構造に基づいた身体的所見と結び付けて医師にも必要な情報として共有してもらえることができれば、医師と看護師との懸け橋になれると考えています。看護師の持っている小さな変化をとらえるアンテナは患者さんを守る重要な武器です。研修で学んだ臨床推論を生かして看護師が気付いた小さなサインを医師と共有していくことを目標に頑張っていきたいと思っています。

NDC研修センター在学中に筑井さんに指導に来ていただいた際に、特定ケア看護師について病院内での広報活動を行っていただきました。しかしまだまだ認知度が低く、働き方を理解していただけていない現状があります。自分の中でも具体的にどのように活動していけばいいのか迷いがあることが原因ではないかと感じています。

研修中より指導医をはじめたくさんの人たちに支えていただきました。まだまだ未熟で研鑽中ではありますが、今は与えられた場所では何ができて、どんなことを必要とされているのかを考え前に進んでいきたいと思っています。地域でたった一人の特定ケア看護師である私は、自分が歩いた道が新しい道になっていくことを信じて迷いながらも進んでいきたいと思っています。